新　刊

□田中次郎（解説），中村庸夫（写真）：**日本の海藻　基本284**　248 pp．2004．￥2,800．平凡社．ISBN: 4–582–54237–9.

頁をめくるたび海藻の水中写真の美しさに唸らされる．しかし，考えてみれば不思議である．そもそも植物図鑑は目の前に生えている花や木の姿をみて，その名前を知るために使われるものだと思うのだが，いったい誰が海の底で揺れている海藻を前に図鑑をめくるというのだろう．そう．ダイバーである．近年のファンダイビングの広まりは，魚やウミウシのみならず，海藻への関心も高めているらしいのである．しかも，生きた海藻の姿を満載したこの図鑑には，海に潜ることのない人でさえもつい見入ってしまう魅力があるようだ．本書を手にして，いよいよ海藻の図鑑も新たな時代を迎えたと思わざるをえない．

従来，海藻図鑑は押し葉標本あるいは生藻体を室内で撮影した写真で図版を組んだものが主流であった．もちろん海中での海藻の生態を示すために水中写真は撮られてはいたけれど，種類は限られていたし，解像度も低かったので，海藻種の同定を目的とする図鑑にははなはだ不十分であったのである．そうしたなかでは，瀬川宗吉（1956年）の「原色日本海藻図鑑」（保育社）と千原光雄（1981年）の「学研生物図鑑　海藻」（学習研究社）が使いやすく，私などは人に図鑑を薦めるときは，後者の新装廉価版（2002年）である「フィールドベスト図鑑11　日本の海藻」（学習研究社）を迷わず挙げていた（今後は迷いそうである）．しかし，一眼のカメラを収納して海底へ携帯できるハウジングが普及したことなどで同定に堪えるような写真の撮影が可能になり，すでに地方の海藻図鑑や特定の分類群に限ったモノグラフには，水中写真が多用されるようになってきている．本書は生態写真で日本全体の主要海藻をカバーした図鑑としては初めてのものではないかと思う．

著者の田中次郎教授（東京海洋大学）は，日本産海藻の分類についていまもっとも活躍されている研究者のひとりである．以前から，海洋写真家として有名な中村庸夫氏（株式会社ボルボックス）とタッグを組み，「海辺の生き物」，「サンゴ礁の生き物」（山と渓谷社）などの図鑑を著している．ダイビングの際に採集と撮影の両方を行うのは著しく困難なことで，研究者はなかなか生態写真の撮影にまで時間と労力を割けないものだ．海藻を動物の背景としか考えない多くの水中カメラマンと異なり，海藻を主役にシャープな写真を撮る中村氏とのコラボレーションはまことに理想的といえよう．

本書では，284種の日本産海藻を緑藻，褐藻，紅藻の分類群順に紹介している．生態写真だけでなく標本写真もクリアで素晴らしい．あえてささいな難点を挙げるとすれば，レイアウトがやや複雑でしばしば写真の海藻の名前が隣頁の種と混同しやすいように思う．各分類階級にもラテン表記が用意されているが，緑藻綱，褐藻綱，紅藻綱にそれぞれChlorophyta，Phaeophyta，Rhodophytaの名をあてているのも気になった．　（北山太樹）